

イスラム学

◇教員◇

教授：柳橋博之

准教授：菊地達也

◇学生◇

学部：7名、修士課程：6名、博士課程：5名

イスラム世界を指して、人は時に「中洋」と呼ぶ。東洋とも西洋とも異なる独自の文明をもった世界という意味である。日本は古来、中国、インドから多くを学び明治以降は西洋から多くの文物を摂取して国の近代化に努めてきた。大学教育がその中で主導的な役割を果たしてきたことはいうまでもない。しかし、その間、「中洋」への日本人の主体的学問的関心はほとんど欠落したままであったし、ましてや思想的な出会いや対決は皆無であった。それは、日本人とイスラム文明との直接的接触がそれまでなかったこと、また近代において日本人が学んだ科学技術文明は、イスラム世界ではなく、近代西欧において開花したこと、などの理由による。

では今現在の状況はどうか。かつてと比べれば、イスラム世界は随分と身近になってきた。イスラム原理主義、イスラム金融、アラブの春、ハラル認証など日常生活で耳にしたことがあるはずである。しかしその身近さは皮相的なものにすぎないのではないか、前述の思想的対峙はなされているのか、と反省する必要がある。イスラム教というものが世界情勢において前面に出てきて、イスラム教徒人口も増大している今、イスラム教とは何かを問う学問的営為が要請されるのである。祈りをささげる敬虔な信者を目にすることもあろう。しかしその姿に感銘をうけるだけでは不十分である。祈りをささげる際に唱えられるクルアーン（コーラン）には連綿と続けられてきた解釈の歴史があり、あるときには異端すれすれの解釈が加えられることがあった。祈りをささげる信者がこのような歴史の重みを背負っているのだというところまで想いを馳せなければならない。そのような想像力から学問的営為は出発する。

我々の多くはイスラム教徒ではない。この事実は結構、重い。何がしかイスラム教の教理があるとして、それを絶対的な真理として我々は受け取ることができないし、イスラム教なるものの未来に関して何が理想的なイスラム教なのかを決定する立場にもない（逆に今現在のイスラム教の在り方が間違っていると指摘する立場にもない）。せいぜいなしうることはイスラム教を信奉する人々が何をどのように考えているのかを彼らに寄り添いながら思考していくことだけである。神から与えられたと彼らが考える真理をまったくのたためだと突き放すのではなく、また全面的に受け入れるのでもない、中間的な立場に立つことになる。日本で行うイスラム研究はそのように微妙な立脚点に立っているのである。

ではそのような立場でいかにして学問的営為が成り立つのであろうか。学問的営為はつまるところ問いである。我々が問いを發する場は神を所与のものとする場ではない。あくまで今現在われわれが生活している空間内で發せられる問いである。神を所与のものとする思想空間はあくまで問いの対象であって、問いの場ではない。我々はすでに神が所与のものとしてある空間にはいない。しかし神が所与のものとしてある空間がいかにして成り立っているのかを考えることはできる。それを考え、問いを發することは我々が今ある空間をより豊かにすることにもつながっていく。イスラム学専修課程ではそのような立場でイスラム教を研究する。

「イスラム教」とは何か、もう少し狭くとして「イスラム思想文化」とは何であるか、その領域を画定することは難しい。クルアーンやハディース（預言者の言行録）を中心とした一元論的思想文化であると考えられがちであるが、それは誤りであって、もっと大きな広がりをもつ領域である。便宜的にイスラム研究は文学部の一部門に押し込められているが、イブン・スィナー、ビールーニー、イブン・ハイサムなどの活動を見ても分るように医学、天文学、数学など科学の分野も包摂しているし、法学もイスラム教にとって重要な位置を占めている。結局、総合大学のあらゆる学問分野がほとんど研究対象としての視野に入ってくるのである。これはイスラム研究の一つの醍醐味であろう。

イスラム世界が何であるかの定義も難しいが、イスラム暦（ヒジュラ暦）が用いられている、もしくは用いられてきた地域がイスラム世界である、という定義がある。もしこの定義を使うとするならば、イスラム世界とは数限りないほど多種多様な言語が使われている地域ということになる。ク

ルアーンの言語であるアラビア語だけではなく、ペルシア語、トルコ語、ウルドゥー語、中国語、マレー語などもイスラム世界の言語なのである。同様にイスラム教は宗教という点からみると単なる一宗教であり、研究対象として極めて幅の狭いものに見えてしまうが、その内部には莫大な領域が潜んでいるのである。

一口に「イスラム学」といっても、その学問的営為の具体的内容は広くかつ深い。それだけに研究の方法も多岐にわたり、一定かつ共通のものがあるわけではない。したがって文献学的研究のみならず、哲学、宗教（史）学、倫理学、美学、比較思想の立場からイスラム教を研究することができるし、法史学、比較法学の立場からイスラム法を研究することもできる。最近提出された卒業論文の題目を見てもそのことが分る。

2016 年度

『四典要会』における馬徳新の来世思想」

「アンリ・コルバンにおける Imaginal と Imagination について」

2015 年度

「イスラーム急進派思想の源泉：統治論とジハード論を手掛かりに」

「ジャッサースの法理論：マスラハ論とキヤース論の検討を中心に」

「ムスリム社会における幽霊観：現代中東地域における事例を中心に」

2014 年度

「イスラム教における『天使』論：アリー・ザイヌルアービディーンの祈願集において」

「ニターク・フェスティバルから見るエジプト現代アートの諸相」

「日本におけるモスクの地域的役割とその可能性：大塚モスクの事例を参考に」

2013 年度

「自爆攻撃とイスラーム」

「イスラーム法における家族観を日本民法と比較して——日本の最高裁違憲判決を題材に——」

2012 年度

「イスラームの食物規定について」

「近代イランのナショナリズムにおける在外同胞」

2011 年度

「アラブの春と、ソーシャルネットワークが果たした役割」

2010年度

「シャトランジュ——イスラム世界のチェス——」

「イブン・イドリース研究序説」

『『鳩の頸飾り』における魂の高貴さについて』

イスラム学専修課程では古典文献をしっかりと読むことを主眼におく。たとえ中世期を研究対象とせずに現代のある地域のフィールドワークをすすめるにしても、古典文献の基礎知識がないと薄っぺらなものになってしまうからである。したがって演習は主にアラビア語文献講読である。単に文献が読めるというレベルを目指すのではなく、問題点の抽出、その解決方法へいかにたどり着くのかといったところまで含めての文献講読である。このように文献を深く扱うなら、どうしても領域的には狭くなってしまふ。それを補うのが特殊講義である。イスラム学専修課程の専任教員は2名であるが、それに加え、他大学から講師の先生を招き、さまざまな分野に対応できるよう配慮している。参考までに、2017年度の授業担当者を以下に列挙しておこう。

柳橋 博之

イスラム法を専門としてきたが、近年はハディースに主たる関心があり、法学ハディースの形成過程を考察している。ハディースの内容とともに伝達のパターンにとくに興味がある。

菊地 達也

イスマーイール派、ドゥルーズ派といったイスラム少数派をフィールドとする。彼らが持つ哲学的な側面を分析するとともに、イスラム世界でどのような地位を占めていたのかにも留意し、イスラム教における少数派のあり方を研究。

藤井 守男

ペルシア神秘主義文学が専門。イランの文学の展開をイスラム思想との係わりの中で捉え直すことを通じ、イランに関する文化的眺望を得ようとしてきた。最近ではイスラム神秘主義（スーフィズム）とイランの文学の関わりについて研究を進めている。

池内 恵

イスラム政治思想を中心にアラブ世界の近現代の思想史研究を行っている。思想発展と政治・社会とのつながりを重視し、中東地域研究・国際政治学の中にイスラム思想史研究を組み込もうとしている。

榮谷 温子

アラビア語学が専門。正則アラビア語やアラビア語の諸方言について研究してきたが、日本語母語話者に対するアラビア語教育についても分析を進めている。

佐々木 紳

オスマン帝国史、とくに19世紀から20世紀初頭にかけての近代史を専門とする。おもにオスマン・トルコ語の新聞史料を用いて、「新オスマン人」と呼ばれるムスリム知識人の政治運動、思想、議論を研究している。

演習ではアラビア語を主に使うが、自分で研究を進めていく上で、また卒業論文で使用するテキストに関して特にアラビア語を選択する必要はなく、他のイスラム世界の言語を選択することも可能である。ペルシア語やトルコ語に特に惹かれるならばそれでもかまわない。原典を読み、理解を論文レベルにまで高めるのはそう容易いことではない。また、たまたま選択したテキストが難しいものであったりすることもある。しかし必要であれば大学院生が読解の手助けをしてくれるので、それほど心配しなくてもよい。また教養課程でアラビア語を学んでいないとイスラム学専修課程に入れないということもない。三年次でアラビア語を基礎から始め、立派に論文を仕上げた卒業した者も多い。学問以外でも、少人数学科の利である学生、院生、研究者との親密な交流が期待できる。

イスラム学専修課程修了後の進路は就職が多い。就職先は官庁やマスコミも、また一般企業に進む者もいる。卒業して就職するならイスラム学専修課程で学ぶ内容はその後の人生に直接役に立つことではないだろう。しかしこれまでほとんど知らなかったことを主体的に学んでいき、またその知識を深めていく過程を経験することは何らかの役に立つはずである。逆にいうとそのような経験ができるのは学生時代しかないかもしれない。